

わだちだ

株式会社 西村交益社
つるぎ会館カード会員情報誌

Vol.4



紡ぐ

2019
SPRING
SUMMER

ご葬儀のことから
その後のことまで
なんでもお気軽にご相談ください

もしもの時は
24時間365日
日本全国どこからでも
☎ 0120-62-5909

公衆電話・PHS対応。



ハートフルセレモニー
nishimura つるぎ会館

株式会社西村交益社
〒667-0044 兵庫県養父市八鹿町国木 133-1
tel.079-662-5909

www.koekisha.info



協力店ショップガイド

おしえて戌亥先生

玩具博物館の窓から

ブラジル滞在記

今日を紡ぐ／Rico Cafe

時間という神様／分散ギャラリーー養蚕農家

風景の輪郭／大屋町大杉

紡ぐ

「わだち」に込めた思い

(株)西村交益社つるぎ会館

ある日、会館を訪ねて来られたご夫婦。

「自分達の葬儀の事を相談しておきたい」との事でした。

ご主人が困難な病氣と闘っておられる事、二人の娘さんは、

それぞれ嫁がれて、遠くにお住まいであること・・・など、

ご事情をお聞きしてから

プランの内容や式の流れ、費用など提案しました。

話が終わり、コーヒーをお出しすると、

「よしっ、これで終(しま)いは、決めた。あとはこれからどう精一杯生きるか。

コーヒーが特別美味しく感じるわ。」とおっしゃいました。

そのことがずっと胸の奥にあり、当社にその「これからの人生」を

少しでもサポートできる事がないかとの思いから、会員カードを作ったのです。

まだまだ発展途上ではありますが、もっとお得で便利なカードにしていきたいと思っております。

「わだち」は、車の通ったあとに残る車輪の跡の事です。

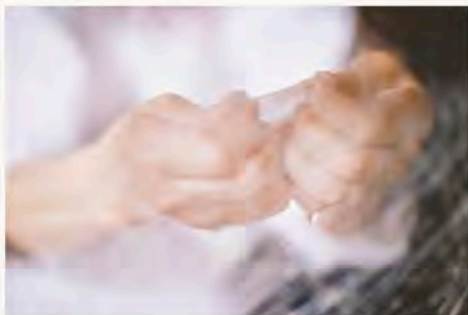
古代ローマ遺跡を旅した時、何千年も昔の馬車の跡がくっきりと残っていました。

会員の皆様が歩んでこられた、尊い人生がそこに重なるように思います。

つるぎ会館カード会員情報誌の名前を「わだち」にしたのはその思いがあったからです。

「今日という日は、残りの人生の第一日目である」

私達のこの「わだち」が少しでもお役にたてることを願って。



風景の輪廓

兵庫県養父市大屋町。

いくつもの時や世代を越えてきたこのまちの風景は過去が形として現代へと引き継がれ、今もなお呼吸し続けている。

大杉区を歩いたのは梅雨明けの便りが届いた7月。虫の声、風の音、そしてたくさんの鮮やかな緑に包まれ、私は風景の中へと足を進めていた。

まちを歩くと、まず目に飛び込んでくるのは、独特な古い三階建ての建築物の数々だ。当時この辺りでは養蚕が盛んで、一階部分は居住スペース、二、三階は蚕を育てていたらしい。また二、三階部分に見える窓のようなもの。これは蚕を育てる中で、桑がいらなくなった時に捨てるために使われていたものだろうだ。そして、建物の上には、

抜気(ばつき)という小さな部屋が見える。これは、養蚕に必要な不可欠な換気のために使われていた部屋で、手動で開閉ができる仕組みになっている。

「二階で暮らしていると、ガサガサと蚕が桑の葉を食べる音が二階から聞こえていた。」という当時の話を、この地域ではよく耳にする。現在は、産業としてはなくなってしまうが、これら残された建築は、かつての暮らしを現代へと伝える役割を果たしている。

さらに隣の蔵垣区では、養蚕の文化継承のための「かいこの里」という施設があり、この地域での養蚕の歴史が学べる他、桑の葉や蚕も毎年地域の人たちの手で育て、かつての養蚕を現代へと繋いでいる。

このまちを歩くと、モノやコトの価値を次世代へと繋いでいるのはその時々「人たち」だということを感じます。つまり、この風景の中には、過去と同居する現代に暮らす人たちの営みがあるのだ。



小さな旅のススメ

兵庫県養父市

大屋町 大杉・蔵垣



今日は予定を入れない

ブラジル滞在記 空飛ぶ川

ブラジルでは、夏になると、途方もない雷雨に見まわれます。ブラジルの夏季は、十二月から二月末頃迄ですが、毎日強烈な雷雨がやってくるのです。その時間は決まっていません。夜の場合、雷光と雷鳴は、ガラス窓を貫くほどです。早朝の勤行時、見上げる空が青く澄んで、快晴だと、午後か夕方には、ほぼ間違いなく雷雨です。そんな日の洗濯は、早めに干した方がいい。時折外に出て、空を見上げると、入道雲が大空に散らばって出来て、その雲たちが徐々に集まって同化し、白雲が黒雲に変わると、まず風が吹き始めます。古葉をまき散らし、台風並みの風になります。そして空が真っ黒になり、雷鳴が轟き、しばらくすると、大粒の雨が叩きつけてきます。軒下においても、イグアスの瀑布のごとき水しぶきで、ズブズブになってしまう。だいたい一時間余り荒れ狂い、突然止む。そして何事も無かったように陽が差して、夏の暑さに戻ります。

実は、夏季に入るまでから気になっていたのが雲の様子で、日本では見たことの無い分厚さと形状なのです。機内から見ると、一部が盛り上がっている場合もあれば、何層にもなっている雲もあり、その雲に突入していく時は、不安を覚えるほど機体が揺れます。国内便の小ぶりの機体は、翼が折れてしまうのでは・・・と思えるほどです。昼間に空を見続けるのが面白い。あえて申し上げておきますが、暇だからじゃない。意識してその時間を作っているのです。それくらいに空と雲の動きが面白いのです。

南米大陸の空模様を調べてみると、面白いことが解ってきました。まず『雷』について。世界一の雷は、ベネズエラにある南米最大の湖「マラカイボ湖」に発生する雷。年間二百六十日、雷が発生し、一時間に走る稲妻の数は三千六百本。不思議なことに、この雷は音がしないらしい。何故かは未だに不明だそうです。稲光だけがひっきりなしに発生するので『マラカイボの灯台』と呼ばれ、カタトゥンポ川河口部を航行する船の安全を助け、大航海時代からその存在が知られていたといわれています。ブラジルの場合は、前述したように音もすごいし、ほとんどの雷が落ちます。だから毎年百人以上が落雷で亡くなります。たぶん今日も午後には過激な雷雨となることでしょう。

さて、次に調べたくなかったのが雲です。雨が降る前の何層にもなっている厚い雲にはびつくりします。まるで悪魔が黒雲の断層面から顔を出して襲ってくるような、そんな気持ちになります。どんな雲も元は水蒸気です。海面や陸地が熱せられ、空に上がって雲になる。そこで調べました。ブラジルの巨大な雲になる水蒸気はどこから生まれるのか。その多くは大西洋上からではなくて、ブラジル北部に広がる、アマゾン川流域の広大な熱帯雨林から生まれるのです。密林の樹木が生成する水蒸気は、なんと一日二百億トン。アマゾン川が大西洋に流す水の量は百七十億トンだと、科学者アントニオ・ノブレ氏は発表し、この大西洋上で生まれた雲と、熱帯雨林より生成された豊潤な水を含んだ雲が一緒になって、途中雨を降らせながら南下し、世界で最も有望な穀倉地帯である、ブラジル中南部、アルゼンチン北部、パラグアイまでの土地を潤していくのです。スイス人のジェラルド・モス氏は、南米大陸の北から南までの長い距離、生命の水を運ぶこの雲を『空飛ぶ川』と呼びました。今日も『空飛ぶ川』を眺め、南米の自然に、あらためて「畏敬の念」を抱き、ため息が出ました。



高野山真言宗高照寺

花の寺の「花説法」は有名で、毎年訪れるファンも多い。

兵庫県養父市八鹿町高柳1156 tel.079-662-2865



高野山真言宗高照寺(花の寺)住職

密祐快(みつゆうかい)

青年時代に中南米を放浪。放浪中の2年間、グアテマラのインディオ達と暮らす。帰国後、僧侶として、又現代美術作家として各地で活動。高野山の命を受け、南米開教区総監としてブラジルに赴任し、3年間の任務を終え、今春帰国。

おしえて! 戌亥先生



Q「お葬式は終わったのに、
速夜とか法事をする意味はあるのですか？」

家族の一員が亡くなった直後は、遺族にとってショックは大きく、悲しみ、後悔しますが、「去る者は日々に疎し」と言われるように、月日が経つにつれて、悲しみも薄れ、同時に故人に対する感謝の気持ちも希薄になりがちです。このことを十分にわかまえていた私達のご先祖や僧侶が、故人に対する供養と感謝の心を忘れぬように、法事(法要)をきちんと定めておいてくれたのではないのでしょうか。

故人の冥福を祈ることは、遺族にとつて、大変意義のあることなのです。死後七日目に始まる、初七日から四十九日の中陰(中有)といい、死から、再び生を

受けるまでの期間を指します。

四十九日が、中陰が満ちる日なので「満中陰」といいます。宗派によって違いはありますが、生前の行いに対して、七日毎に七回の裁きを受け、極楽浄土に行けるかが決まるとされています。これは「輪廻転生」の考え方で、来世には六道(天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄)があり、どの世界でも、苦しみがあります。それらを超越した存在が極楽浄土です。四十九日までの法要は、この極楽浄土に行けるように願いを込めて、それ以降の法要は仏様への感謝の気持ちを伝え、故人をより良い世界へと導いてもらう為に行われるのです。

初七日の供養

最近では葬儀・告別式のあと、その日の内に行くことが多いですが、本来は七日目にするべきです。人は死んで来世へ行くまでの間に「三途の川」を渡らなくては行けないのですが、その日が亡くなってから七日目とされています。この三途の川には流れのとても強いところ、少し強いところ、ゆるいところの三つの瀬があり、このうちのどこを渡るかは生前の善悪の行いで決まると言われています。初七日の法要は死者の霊がゆるやかな流れを渡れるようにと遺族が行う供養です。

四十九日は忌明け法要

四十九日は最後の審判が行なわれる日とされるので、死者の成仏を願って、遺族、近親者、親しい人、知人が集まり忌明けの法要を行います。納骨、埋骨もこの日に行くことが多いようです。

百ヶ日

これは、土葬された遺体が白骨化するのが百日目の頃なので、靈魂が完全に肉体を離れるという信仰から来たものです。最近の葬儀は火葬式なので「百ヶ日」法要は薄れがちです。

一周忌以降

亡くなって一回目の「祥月命日」に法事をするのは、誕生日を祝うのと同じように、亡くなった日を記念して、法事をつとめたいという自然の気持ちからであると思われます。その後は、「三」「七」という、仏教で古くから重んじられている数の年ごとに法事を営むようになってきました。その後も十三、十七など、「三」と「七」のつく年の祥月命日を法事として五十回忌(満四十九年)で、故人の法事の終わりとなりました。(宗派によっては三十三回忌で終わることもあります)その頃になりますと、死者を個人的に知っている人が殆どいなくなるため、一人の故人として偲ぶよりも、ご先祖の一人といった受け取り方になりますね。日本人は、古来ご先祖を大切にしている国民ですので、五十回忌が終わっても、先祖代々として、春秋の彼岸と盂蘭盆会に先祖供養の行事を行ってきたのです。法要は、故人を偲び、冥福を祈るために営むことです。皆で集まり、故人への思いや自分の存在、そして友人や知人とのつながりに感謝する場です。法要は「追善供養」と呼ばれ、生きている人が故人の代わりに善行(功德)を追加することです。大きな意味があると、私は思います。

冠婚葬祭コンサルタント

戌亥 正三郎

関西テレビ・毎日放送でもお馴染み、業界第一線で活躍中の冠婚葬祭アドバイザー。終活セミナー、エンディングノートの講師で日本中を駆け回る超多忙な毎日。また、日本のしきたりや食育の講演も多く、全国のセレモニーホールで新人研修にもあたる八面六臂の活躍ぶり。2009年より弊社顧問。

